

フッサール時間論の生成

小 熊 正 久

序

世界や世界内部のものは総じて時間的存在であるゆえに、それらを構成する意識の現象学を目指したフッサールにとって、時間意識は基底的な意味合いをもっていた。^①

一九〇四／〇五年冬学期に行われたフッサールのゲッチンゲンでの講義『認識の現象学と理論の主要部』は、「一 知覚について」、「二 注意、特別な思念などについて」、「三 想像と像意識」、「四 時間の現象学のために」という主要部分を含んでおり、時間の主題はその掉尾をなしていた。その講義の冒頭で、フッサールは、かつての草稿を通覧した感想を次のように語っている。^②

私は、『論理学研究』において正當に扱わなかった多くの思考や、当時すでに論じた多くの本質的困難が私の公刊物において触れられておらず、それ以上追求されなかったことに気づいた。そこでは、記憶の全領域とともに源的時間直観の現象学の全領域もいわば黙殺されていた。私は、ここに横たわる異常な困難、おそらく全現象学の最大の困難を克服できなかったし、あらかじめ自分を束縛しようと欲しなかったので、むしろ沈黙し通したのである。^③

また講義草稿について、『著作集第十巻』の編集者ルドルフ・ベームの序は、「フッサールは、講義の最終部のための準備を、最初の三部分に対して——もちろん広範囲の前もつての作業をもとに——行ったような形では完結させることはできなかった」と述べている。その後フッサールは、講義草稿から不十分な記載を除外したり新しいものを加えたりしたが、その際、「記載の直接の首尾一貫性に配慮することはなかった」。その補足や置き換えの成立時期は少なくとも一九一一年にまで及ぶが、その用紙の束は、助手を務めていたシュタイン女史の手でまとめられ、一九二八年にM・ハイデガーの編集による『内的時間意識の現象学 Zur Phänomenologie Des Inneren Zeitbewusstseins』として『哲学と現象学的研究のための年報 第九巻』に公表されたのである。こうした事情により、同書はこの主題について整理されて著されたものではなく、成立年代もまちまちの草稿からなる書物となった。だが、その後も、フッサールは時間意識についての自らの見解をさまざまな時期に見直し、多くの草稿を残した。

さて当初から、時間的な存在の典型として、ある程度の時間的長さをもつメロデーが選ばれ、そうした時間的存在を捉えるためにはどのような意識の働きが必要か、と問われた。この説明が不完全ながらも一応まとまったのは「個々の音は、過ぎ去ってもまだ取り押さえられている」という「過去把持 Retention」の概念が一九〇五の講義の頃にある程度確立されたことによると思われる。そこで本論文では、その時期までのフッサールの問題意識と省察の検討を通して、その時期の思想と未解決の問題を明確にしたい。

最初に、考察の出発点をなす「一八九三年から一九〇一年頃の草稿」にみられる考え方を概観し（第一章）、つぎに一九〇五年頃における到達点と残された問題点とを見ていく。その際、後者はマイノックとブレンターノの説に対する批判的検討を経て形成されたので、その点も考慮する（第二章以降）。

第一章 一八九三年から一九〇一年頃の草稿にみられる思想

この草稿群は『著作集第十巻』にB—Iとして収められている。そこでは、「新鮮な記憶」や「統握」といった用語が用いられており、その後のフッサールの時間意識の分析の枠組みとなるものである。

草稿第一番の冒頭で、分析のための基本的問題設定がなされている。

どのようにして、メロディーの統一のように比較的長く連続する変化の経過の統一、次々と遂行され展開される統一の表象が生じるのか。時間的連続と持続のごく短い区間だけが一目で、瞬間的直観において見渡され、こうしてメロディーのごく小部分だけが何らかの瞬間に直観されうるのであるが⁽¹⁾。

これに続いて、「個々の音」の知覚のほかに、メロディー全体を包括する「作用」の必要性が説かれ、次いで、これらの必要に対応すべく、「直観」の概念が、「瞬間的直観」と「統一的で持続的な注目」を表す「全体的直観」の二種類に分けられている。

草稿第二番では、さらに立ち入って、次のように述べられている。

時間的経過を知覚すること、それは、現在の現存在Aを、まさに過ぎ去って对象的にそれと連関しているBと、そしてさらに後方にあるCなどとともに知覚することである。すなわち、Aを知覚し、後退(Zurückziehung)のプロセスにおいて、Bを次に過ぎ去ったものとして体験する、などのことである。この全体的系列は知覚されており、それは、われわれが対象的統一に留目しそれを知覚する限りにおいて、現在の出来事である。⁽²⁾

右の「後退」という語はF・ブレンターノに由来する用語であり、この現象によって「メロディー全体の知覚」が可能であるとされている。

これに続く箇所では、時間的諸関係が過去として「統握される」と言われている。この問題性については、のちほどみることにするが、「統握内容と統握」という図式が時間意識に関してはじめて使われている点で注目に値する。

また、「後退」と「反復」（想起）の関連について、次のように言われている。

私がC、Dという二つの音の系列を体験して、まだ新鮮な記憶が成り立っているなら、私は一組の表象（C）（D）によって像的に：反復することができる。私は内的にCDを反復し、その際、最初に音Cが、次に音Dが起ったと判断する。これが「まだ生き生きとしている」間に、私は再びそのようにすることができる……。

ここでは、諸音の「新鮮な記憶」が「反復」と区別され前者が後者の可能である根拠とされているが、編集者の註記によれば、後にフッサールは、前者の説明である「これが『まだ生き生きとしている』間に」という語に、「私がまだ過去把持、確保を行うことができる間に」と付記している。ここから、「新鮮な記憶」という用語がのちの「過去把持」の前身であったと考えることができる。また、上の引用に続いて、「たしかに私はこのようにして、根源的な領域から外へ出ることができると言われている。これは過去意識としての「新鮮な記憶」の根源性を示すものである。」

そのほか、「未来」に関しても、「予期」と「充実」が語られ、それを踏まえて、「予期」、「現在の意識」、「過去の意識の関連についても語られている、この点は「ベルナウ草稿」などで重要な主題となるが、ここでは立ち入らないでおこう。

次に、こうした「新鮮な記憶」の内部構造に関わる問題を三 điểmておこう。

（一）「新鮮な記憶」や「想起」の転変の中で対象が同一の持続するものとして把握されることが述べられている。

「或る音」Aが持続する際、その持続のそれぞれの瞬間のAは分離されたものではなくて、同一のAである。時間諸点、連続的に一つ一つであるように、Aは連続的に同一である。¹³⁾

こうして、ある内容の「連続的同一性」とともに、「時間的諸点」の統一も問題になっている。後者は、過去の^{ある時点が、次第にさらに遠くの過去へと後退するが「同じ時点」として意識されているということである。}これは、のちの「個体化 Individuation」の問題につながるものである。

(二) 草稿第十二番では、知覚そのものの「時間的広がり」が問題になっている。

…一つのメロディーの知覚は時間的に広がり、次第に常に展開し、常に知覚である作用である。そしてこの作用は常に新しく新しい「今」の点をもち、この今において何かが今として対象(今聞こえた音)となる。だが同時に^{たものへ}、そしてさらに^へもっとさらに過ぎ去ったもの^がが幾らか分けられて対象となっている。¹⁴⁾

だがこのように、メロディーの知覚そのものが「時間的広がり」をもつ作用であるとなると、「現在」という一位相がどのようにして「時間的広がり」をもちうるかという問題が生じるであろう。これに関しては次のように記されている。

…今はほとんど虚構的な数学的点のようなものではなくて、「以前の音」、以前の第一の、第二の音、あるいは以後の音と同様のことである。むしろ…それぞれは、その明らかな広がりをもっている。(もちろん、時間位置としての客体の広がり^りが広がらずに、すなわち、^へ分割できるものとして現出する幅^幅なしに現出することも可能かもしれない。しかしその際、不可分なものは不可分の数学的点と同様に理念的限界である¹⁵⁾。

このように、「今」が広がりをもつとされている一方で、それが数学的な点と同様な「理念的限界」だという可能性も示唆されている。しかし「限界」と「広がり」との関係はどのように理解すべきであろうか。だが、これは

マイノシクの説の検討に際して正面から取り上げられる問題点である。そこでの展開をみることにしよう。

(三) 最後に、知覚が「新鮮な記憶」へと変わる際の「内容の変化」の問題について見ておこう。草稿第七、八番では、「新鮮な記憶」の「内容」が過去を「代表象 Representation」(ないし「再現」)し、それによって過去が呈示されるというように、過去の意識を「像性の意識」と解する見方が述べられるとともに、その「内容」が問われている。現在の意識から「新鮮な記憶」への移行の際には「内容」に変化がなければならぬ。だが、それは「青から赤への変化」のような「質的变化」とは考えられないゆえに、その「像性の意識」は「類似性による写像」であると説明されている。次のように、「類似したもの」が過ぎ去った内容の像となるというのである。

…類似性を通しての写像「がある」。たしかに時間的な後退において現出は変化し、メロディーの第二の音が出現する際に最初の音は「まだ」意識されているが、もはや、それがあったとおりにそのものとしてではなく、「色あせた」仕方においてである。⁽¹⁶⁾

続いて草稿第九番では、「想像」の場合の「内容」すなわち「ファントスマ Phantasma」が考察され、第十番では、それと「新鮮な記憶」の内容が対比的に論じられている。こうしてこれらの「内容」が何であるかということについての考察は続けられているが、明確な解答はえられていない。ともあれ、この時期に「過去の意識」が「像性の意識」の一種として扱われていたことが、確認される。⁽¹⁷⁾

以上、内容の連続的同一性と時点のそれ、知覚作用の時間的広がりと今のあり方の問題、過去を代表象する際の代表者は何かという問題を見てきたが、これらを念頭に置きつつ、一九〇五年講義の時期に時間意識がどのように扱われたかをみていこう。「時間的広がり」と「今の点」に関連する、マイノシクの説への対応を最初にみよう。⁽¹⁸⁾

第二章 マイノック説の検討

フッサールが批判的検討の対象としたマイノックの論文『高次の諸対象とその内的知覚への関係について』⁽²⁰⁾によって、マイノック説の概要をみておく。

彼は、「不可欠の前提としての他の対象の上にいわば構築される対象」を「内的に非独立的な対象」と呼ぶ。またその場合、前提として不可欠の対象のほうは「下位のもの」ないし「低次の対象」、その上に構築される対象のほうは「上位のもの」ないし「高次の対象」と呼んでいる。「内的非独立的な対象」の例としては、諸対象の間の「関係」や、「4個の果実」や「メロディー」といった「複合体」があげられている。4個の果実の場合には各果実が、また、メロディーの場合には各音が不可欠の前提としての対象となるのである。⁽²¹⁾こうしてメロディーのような対象は「高次の対象」であるが、とくに「時間的に広がりをもつ対象」という特殊性をもっている。

その「時間的広がり」という観点からマイノックは、対象を以下のように区分している。

一方は「その本性が展開されるために時間的広がりが必要とする」ものであり、他方は、「その特徴づけが唯一の時間点、ないし、いわば時間的横断面において集約的に見出される」ものである。⁽²²⁾

そして、この区別は、表象される対象の運動⁽²³⁾だけでなく、その表象自体にもかかわり、その際運動と表象の関連が問われることとなる。フッサールのまとめに従ってみていこう。それらの時間的関連はまず次のように考えられる。

運動の知覚が次のように起こる。われわれが動くものを点ごとに眼差しで追い、その時間位置には感覚と知覚が対応する、そしてこれらの感覚の最後のものが過ぎ去る。そうすると観察者は運動を見るのをやめる。これに従うと、運動の時間は

運動の表象の時間と並行するように、そして、一方と他方が合致するように見える⁽²⁾。

けれども、問題は「運動全体の知覚」である。先のような各時点での運動体の状態とその知覚があっても、運動全体の知覚がなされているとは限らない。たとえば、次々と「さきほどの知覚」が無に帰するならば、あるいは、まとめて捉えられなければ、運動全体の知覚は行われないのである。

以上は、マイノックもフッサルも認めるところであるが、マイノックはその上で、「広がりをもつ対象」とその表象の問題を「広がりをもつ対象の表象自身は広がりをもつ事実でありうるのか、あるいはそうでなければならぬのか」とまとめ、つぎのように解答を与えている。

高次の広がりをもつ諸対象は、広がりをもたない内容を媒介としてのみ表象されうる。時間的に異なって規定された下位のものが表象作用と同時に与えられなければならない。

先にみたように、表象が継起的であっても、表象は、各時点で対象の持つ広がり全体を把握しておらず、その時々の内容を把握するだけである。そこで、さまざまな時間に属するものが同時に表象されてはじめて、全体が表象されることになる、というのである。しかし、のちにみるように彼は、このことは知覚の「最後の位相」で行われると考えている。

さて、フッサルはマイノックの右の結論について批判的見解を述べているが、それが、フッサル自身の省察につながっていく。まず彼は、マイノックの見解を整理して、「知覚の時間」の二通りの意味を区別する⁽³⁾。

第一には、「連続的に変化する球の位置の知覚（動くものの連続的位相の知覚）」であり、それは「最後の位相に達する際に終わる」。

第二には、「運動A（Bの知覚）」と呼ばれるが、それは「対象A（Bが初めて完全に意識されるところの瞬間的

意識」である。これは先の意味での知覚の「最後の位相」のことであり、時間的に広がりをもってはいない。

その上でフッサルは、次のように、両方の意味での知覚が組み合わさるような形で運動全体の知覚が可能であると考えている。

…完成した運動のこの意識は、最初の意味での運動の知覚においてのみ可能である。従って同様に、運動の直観的表象は、連続的作用においてのみ可能である。この作用は、あらゆる位相において運動の位相を表象するが、全体としての運動を、その自身の変化の終点においてようやく志向の対象とするのである。²⁹⁾

こうして彼は、「変化の直観的な意識は必然的に意識の変化において遂行される」と結論づけ、「だが、このことによってわれわれはすでにマイノंकを超えている」と述べて、マイノंकとの意見の相違を確認している。

けれども、たしかに右の二つの意味の知覚が組み合わせられれば、終点で全体を志向の対象とすることになるであろうが、実は、次の文で疑義が呈せられているように、この組み合わせはすぐさま明らかであるとは言えない。

…広がりをもつ知覚の最終位相を形成するかの瞬間的意識は、いかなる権利をもって運動の知覚と表記されるのであろうか。私がメロディーの最後の音を遂行する意識は、志向的にメロディーの一区間を、ことによると全体区間をとともに把握するかもしれないが、これはメロディーの知覚と呼ばれるのか。それは最後の音の知覚であり、その上その一位相の知覚に過ぎず、メロディーの知覚ではない――³⁰⁾。

こうして、この草稿第二九番においては、フッサルはこの問題の解決に至っておらず、次のようなジレンマを抱えていることになる。すなわち、広がりをもたない一位相の知覚においてどのようにして「運動ないし変化全体の知覚」がなされるかが明らかでないし、一位相のみの知覚は虚構であるとも考えられる。他方、広がりをもつ知覚を考えてもそれがどうして運動全体の知覚となるかは不明である、というジレンマである。

第三章 時間的位相と時間図表

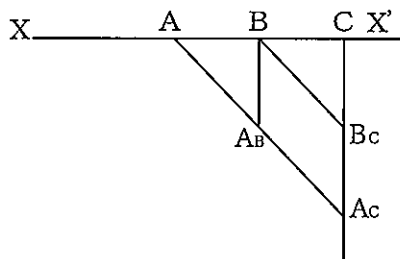
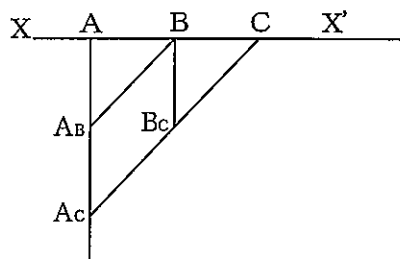
だが、「位相」について考察している草稿第三〇番^(註)によれば、マイノンク説の批判的検討をへて、フッサールは、先の問題を以下のように考えるに至ったと思われる。

第一に、瞬間的直観ないし時間客体の直観の位相がある。例えばメロディーの知覚の中の、最初の音の知覚、最初の二つの音の順次の知覚などが、そうした位相である。

第二に、客体の瞬間ないし客体の位相がある。先の意味での各位相の内部において、メロディーの一定の時間形態が現出する。それは現出する諸位相であり、「前のような」現出の諸位相（体験の直観）ではない。つまり、時間的に広がって現れるものの諸位相が最初の意味での一位相の内部に現れているのである。

最後に、（第一の）直観の位相における統握の諸位相は、（第二の）客体の時間諸位相に対応している。

以上の考察は、次の時間図表で表されるような、横軸と縦軸の対応関係と解することができる。最初の直観の諸位相はXXの軸上のA、B、C等で表され、第二の客体の諸瞬間ないし諸位相は位相BにおけるA_B—B_Bないし、位相CにおけるA_C—B_C—C_Cなどということになる。そして、第一と第二の位相の対応関係は、AとA_Cの対応、BとB_Cの対応などとしてみられる。なお、上と下の図は、図の描き方は違うが、同じ関係を表している。上は草稿第三一番のもの、下は例えば第一〇節などに見られるよく知られた配置である（ただし過去から現在のみ表示した）。



だが、第一章でも第二章でもみておいた一位相と連続性の問題はどのように理解されるべきであろうか。この点については、「瞬間的なものはどこになりたつのか。そしてどのように瞬間的な時間の諸位相は連関し合うのか」という形で問題提起がなされ、次のように説明されている。

瞬間的時間意識において、統握の諸位相は作用—連続性の統一をもつ。作用形式の瞬間は差異化し (differenziert sich)、常に区別される (sich stetig abstut)。諸作用形式は合致し、それにも拘わらず、互いに遠ざかる (微分的類似性の統一はもろん常にそのような統一ではない。色の系列は時間的ないし空間的連続性を前提とする⁽³²⁾)。

ここでは、点のような瞬間が寄り集まって時間ができるのではなく、むしろ「瞬間が差異化する」ことによって時間が生成するという状況が説明されている。また、括弧内の文を考慮すれば、今の瞬間は絶えず差異化するので

あり、微分における極限として考えられるということになるであろう。また、時間図表と関連づけるならば、今は新しい今となりつつ過去の位相として含まれるので、この差異化は、現在の時点から（AからBとAからA_Bの）両方向への差異化と考えるとよいように思われる。このようにして、瞬間性と連続性は矛盾なしに結びつくのである。各位相においてそれまでの位相の内容が累積されているという考え方は、F・ブレンターノやW・ジェームズにも見られるが、各位相の瞬間性と連続性をこのように矛盾なく理解したことはフッサールの独自性を示すものであらう。

さて、草稿第三三番⁽³³⁾では、右に見た位相の関係が「連続体」という用語によって説明されている。それによれば、「知覚の諸位相の連続体」と「一位相の内部の直観的諸統握の連続体」が区別される。そして、これらを組み合わせると、知覚は「連続体の連続体」とみなすことができることになる。この把握は、先の位相と連続性の関連の理解によってはじめて可能になったと言えよう。

第四章 ブレンターノ説の検討

本章では、フッサールによるブレンターノ説の検討をしながら、おもに、意識作用の内部構造の面を考察していく⁽³⁴⁾。

ブレンターノの問題はマイノシクの場合と同様「メロディーのような時間的広がりをもつものがどのようにして知覚されるか」ということであつたが、ブレンターノは、その知覚がなされる心的作用を問うているのである。

まず、メロディーの知覚において、個々の音が刺激の停止とともに完全に消え去るのではないが、音の表象がそ

のまま残留するのではないという条件が述べられている。なぜなら、前者の場合には、個々の音が知覚されては消え去るだけであり、後者の場合には、メロディーの代わりに、同時の音を所有することになるからである。

その上で、ブレンターノは、次の一般的な法則に答えを求めている。

与えられた各表象にはおのずから一連の表象が連続的に結合しているのであり、各表象は先行表象の内容を再生し、しかもその際、新しい表象に常に過去の契機を付加するのである。²⁹⁾

ここで、「過去の契機」となる「表象」とは、「知覚表象に結合する直接的な記憶表象」のことである。音の「記憶表象」が残り、それが音を「過去の音」として呈示するということになる。

ブレンターノ説への批判とフッサールの考察は、一九〇五年講義までに書かれたものに限定すると、『内的時間意識の現象学』の第七、一四、十六、十七、十九節に当たる部分に見られるが、それらの中でフッサールは次のような批判を行っている。

まず、ブレンターノ説では「客観的時間」の存在が前提されていること、また、時間知覚と時間想像の区別がなされていないという論評が行われたあと、さらに三つの批判点があげられている。その第一は、「作用」と「統握内容」と「統握される対象」が区別されていないということである。第二は、その結果として知覚作用ではなく「知覚内容」にのみ相違を求めることになるが、「継続や持続は単に内容においてのみ見出されるのではなく、統握された客観や統握作用にも見出される」はずだ、ということである。第三点は、右の「内容」への限定の批判とながっていて、「意識の内部にA音が現在しているということからは、『A音は過去のものだ』という超越的意識は説明されない」ということである。この点は、ブレンターノは時間表象の心理学的起源を扱っているのであって、そもそもどのようなようにして過去を含む「客観的時間」が可能になるかを説明していないという批判と関連している。

すなわち、「過去の音に記憶表象が結合する」という説明はすでに「過去の音」という点で「客観的時間」を前提としているのであり、フッサールによれば、「過去」はあくまでも「現在からの超越」の経験として解明されなければならぬのである。

以上をまとめてみると、ブレンターノ説は作用の「内容」と「統握」を区別せず、過去へと関わるメロディーのような知覚の可能性を内容の現前にのみ求めている。その結果、内容の現前に過去の起源を求める限り、現在から過去への「超越化的意識」は解明されていない、ということになる。

これについてのフッサールの考察は第十六、十七節において最も明瞭に見られる。第十六節⁽⁸⁾では、次の文に示されているように、「今の点の知覚」が「過去把持」と統一をなしていることが述べられている。まずこの事柄を明らかにしておこう。

……われわれは、今の点のみが知覚された点であるにも拘わらず、メロディー全体を知覚されたものと呼ぶのである。われわれがそう呼ぶのは、メロディーの延長は知覚作用の延長のなかで単に点ごとに与えられるだけでなく、過去把持的意識の統一が経過した諸音をなおも意識のうちに『保持』し、統一的な時間客体、すなわちメロディーに関係する意識の統一を産み出し続けるからである。⁽⁹⁾

とはいえ、「現在の位相」と「過去把持された位相」の区別がないと言われているわけではない。

個々の音は音の所与の連続性において構成されるが、点的位相だけがそのつど今として現前し、他の位相のほうは過去把持的な尾としてそれに接続する。⁽¹⁰⁾

では両者の区別はどのようにして成り立つのであろうか。ここでフッサールが述べるのは、「今」の理念的性格である。

ここでは、諸々の統攝が連続的に移行し合い、それらは今を構成する統攝において終わるが、この今は理念的限界にすぎない。それは理念的限界に向かう上昇の連続体である。

このように知覚は一方では諸作用を含む連続であるが、他方ではそのなかに、今という「理念的限界」を含むのである。

直線上の点は、たとえば直観的に或る一点だけを取り上げようとすれば、他の部分と区別され不連続であるように思われるが、それを連続体のなかの極限として考えることができる。実数を「デデキントの有理数の切断」によって定義し、実数体の連続性を示すような場合はそうである。ここで詳細にみることはできないが、フッサールは数に關して、そうした方法での扱い方を承知している。また、幾何学的な点や直線などもそのような理念的限界として理解している。時間における「現在点」を考える際にもフッサールはこうした「連続性」と「理念的極限」の概念を考えていたように思われる。J・デリダは、「体験はこのような仕方では必ず延長を有しており、点的な位相とこのようなものは決して独立には存在しえない」というフッサールの言葉を引きながらも、フッサールの「現在点」の概念の「点性」を強調していたが、少なくとも、この「点性」は「理念ないし極限」として考えられていたことを考慮すべきであろう。

さて、このように、「理念的今」を含む「知覚」が「現在」を与えるが、同様に、次の文に示されているように、「第一次記憶」ないし「過去把持」の部分が「過去」を与える。

…第一次記憶においてのみわれわれは過ぎ去ったものを見るのであり、ただそこにおいてのみ過去が構成され、しかも再現在のではなく、現在の構成されるからである。

つまり、「過去把持」において、現在に在るものが過ぎ去っていくという経験がなされるのであり、それが現在か

ら過去への「超越化的意識」にほかならない。それに対して、「想起ないし第二次記憶」のほうは、〈過去把持を含む知覚〉の「再生産」である。メロディーを想起する場合も、そのなかに現在の部分と過去把持的部分が含まれることにより、「想起」と「過去把持」が異なることは明白である。この両者を同一視することは、過去自身を与えるはたらきを無視することになるのである。

ブレンターノ説の批判に戻れば、現在に想起が結合することによってメロディーの知覚がなされるという見解は、「過去把持」を無視しており、そのことによって、過去そのものを経験する「超越化的意識」を捉え損なうことになる。こうして、「過去把持」を含む「知覚」において、現在も過去もじかに経験されるのであって、これは、「点的な位相」だけで遂行されるわけではないのである。

第五章 一九〇五年における見解のまとめ

マイノックとブレンターノの見解への批判的検討を中心にフッサールの見解をみてきたが、ここではそれを振り返り、さらに「個体化の問題」を瞥見しておこう。

メロディーのような「時間的に広がりをもつ対象」の知覚可能性について、客体と知覚作用の形式的な時間関係についてまとめると以下になるう。

各位相にそれまでの諸位相が組み込まれ保存されるという形でそのような対象の知覚は可能である。ただし、そのつどの今は、新しい今と過去の今へと差異化され、それによって今と過去との連続性が、さらにそれによって、今に至る過去の連続体も可能である。

そのような時間關係を可能にする意識作用として「過去把持」が「想起」と區別され、過去の根源的意識としての「過去把持」の役割が明確化された。その際、今と過去把持の連続においては、「今」は「理念的極限」として存在するとされている。この見解は上の「差異化」の見解と整合的であり、絶えず今と過去へと差異化する「今」は理念的極限としてしか考えられないということになろう。なお、この差異化は時間図表において、各時点において「今」が両方向に分かれていくこととして表された。「今の意識は絶えず過去意識へと転変し、他方それと同時に次々に新しい今の意識が形成されるのである」。

こうした連続性と差異化によって、「質的同一性」と「個体的時点の同一性」という二種類の「個体化」が可能になる。前者については次のように述べられている。

同じ音が常に出現するということ、この同一性の連続性が意識の内的性格である。時間位置は切り離されるべき諸作用によって互いに區別されてはいない。知覚の統一性はここでは、互いに排除し合う内的差異をまったく欠く切れ目のない統一性である。

しかし実はそこに差異が完全にはないわけではない。次のように各時点の差異はある。

他方各時点は個別的に他から區別される——區別されるが、切り離されはしない——限りにおいて、差異はやはり存立するのである。時間質料の區別したい同等性と時間指定的意識の変様の恒常性が、本質的に、音cの切れ目なき延長の統一性への融合状態を基礎づけ、そして、それによってはじめて、具体的統一が生じる。時間的に広がるものとしてのみ、音cは具体的個体なのである。

こうして、時間的差異を通してはじめて音などの「時間質料」の同一性（先の「質的同一性」）が産出されるのである。なお、このことは、明証性という観点で、内在的内容の明証は時間的延長を含むという重要な帰結を含意

することになる。⁽⁸⁾そして、同じ過程において「時間位置」の「同一的個性」も産出される。

顕在的の今としての今は時間位置の現在所与性である。現象が過去へ後退すれば、その今は過去の今という性格をうるのであるが、しかし依然としてそれは同じ今であり、ただ単にへそのつど顕在的な、時間的に新しい今との関係において過去として現存しているというにすぎない。⁽⁹⁾

第六章 残された諸問題

最後に、彼の後の歩みも若干顧慮しながら、残された問題をみておこう。

(一) 個体化の問題…先にみたこの問題については、講義後の一九〇五年夏期休暇に記された草稿が存在し、そこでは、内在的対象だけでなく、超越的対象である「物」の性質や「空間的形態」の「個体化」も扱われている。これは、内在的与件だけでなく、その超越的把握とも関連する事柄であり、これまで見てきた時間意識の研究では扱われていなかった課題に属すると言えよう。⁽¹⁰⁾

(二) 「統握と統握内容」の図式に関わる問題…初期の草稿でも「新鮮な記憶」について「統握」と言われていたし、一九〇五年成立の第一六節でも「時間客体そのものを与えると自負する作用は必ずそれ自身のうちに『今の諸統握』『過去の諸統握』などを含み、しかも根源的に構成する統握という仕方で含まなければならない」と述べられているように、「統握」という用語が、過去把持を含む知覚に対しても使用されている。また、「今の時点」でも「感覚素材 Empfindungsmaterial」と「客観化的統握」が働いているように述べられている箇所もある。⁽¹¹⁾

もしも根源的の今ないし根源的印象と過去把持的変様のいずれにも「統握」が働いているのであれば、そして先に

みたように、「今」が「理念的限界」であり、「時間質料」は「持続」の中で初めて構成されるのだとすれば、「統握内容」としての「根元的印象」も「過去把持的内容」もその内実は不明確であることになる。以前に「感覺的所与」と呼ばれていたものがじつは持続の中で構成されるとすれば、その持続の一位相にあるものを「感覺的所与」と同じような内容と考えるわけにはいかないのである。また他方、個々の時点での過去把持でなく、統一的なメモディー全体にかかわる把握を「統握」と呼ぶのであれば、個々の位相における「過去把持」と全体的「統握」の違いを明確化しなければならないであろう。

いずれにしても、時間意識に関して使用されている「統握と統握内容」という図式の内実は明瞭でなく、この図式は志向性の分析の根幹に関わるだけに、重大な疑念を引き起こすこととなるのである。

これと関連して、さらに次のような問題も自覚される。一九〇七から〇八年頃に書かれた草稿「二重の志向性」〔著作集第十卷〕第三十九節〕では、統握自身が時間的転変（過去把持的転変）の中で構成されるということが示されることになる。この主題は、意識作用自身の意識に関わるきわめて重要な事柄であるが、その際、もし「過去把持」自体も「統握」の一種であるとすれば、その「統握」もさらに別の時間のなかで構成されなければならないということになり、その結果「無限退行」に陥る、ということにもなりかねない。

以上の問題の追求の記録は、われわれのみた直後のものとしては、『著作集第十卷』B-IV「統握内容—統握という図式の解消」に収められている。

「過去把持」という概念は、今と過去把持の「連続性」と「差異化」といった観点では多にに解明されたものの、それを「統握」の一種であるとする理解は、そうした成果を正しく反映しているようにには思われない。また、ブレンターノ説の批判は、「過去把持」の特性に依拠する面が大であったが、それだけに一層、この点でのさらなる解

明の必要性が残るであろう。本論文註(6)で引いたフッサールの文はこうした状況を表していると考えられる。再度確認しておけば、「過去把持 Retention」は、記憶(想起)のように客体として思い起こすというような形で過去に関わるのではないということである。

これらについては、稿を改めて考察しよう。この時期のフッサールの「過去把持」の理解、今と過去把持の「連続性」と「差異」の理解を明確化したところで筆を擱きたい。

文献一覧

フッサールの著作

- Husserliana Bd.10, *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins* (1893-1917), Nijhoff, 1966.
 Husserliana Bd.19/2, *Logische Untersuchungen Zweiter Band Zweiter Teil*, Nijhoff, 1984.
 Husserliana Bd.22, *Studien zur Arithmetik und Geometrie - Texte aus dem Nachlass (1886-1901)*, Nijhoff, 1983.
 Husserliana Bd.23, *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung* (1898-1925), Nijhoff, 1980.
 Husserliana Bd.33, *Die Bernauer Manuskripte über Das Zeitbewusstsein* (1917/18), Kluwer, 2001.
 Husserliana Bd.38, *Wahrnehmung und Aufmerksamkeit - Texte aus dem Nachlass* (1893-1912), Springer, 2004.
 Husserliana Materialien Bd.8, *Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934) Die C-Manuskripte*, Springer, 2006.
 Edmund Husserl: *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins* mit einer Einleitung herausgegeben von Rudolf Bernet, Meiner, 2013.

それ以外の著作

Kortooms, Toine : *Phenomenology of Time - Edmund Husserl's Analysis of Time-Consciousness*, Kluwer, 2002.

Derrida, Jacques : *La voix et le phénomène*, puf, 1967.

James, William, *Principles of Psychology*, 1890, Henry Holt & Co., 1890.

McAlister, Linda L. (ed.) : *The Philosophy of Brentano*, Duckworth, 1976.

Meinong, Alexius : *GESAMTAUSGABE, Band II, AKADEMISCHER DRUCK- u. VERLAGSANSTALT, GRAZ-AUSTRIA*, 1971.

Stump, Carl : *Reminiscences of Franz Brentano*, in : McAlister.

小熊正久「最初期フッサールにおける空間思想―『理念化』の概念を中心として」、山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 創刊号、2005.

小熊正久、「フッサールの想像論」、東北哲学会年報、No.29, 2013.

成田常雄、「時間の現象学」、世界書院、1992.

註

(1) 使用文献は一括して本文末尾に提示した。『フッサール著作集(フッサリアーナ)』については、本文中では『著作集』と略す。引用の際は「Hua」と略記し、巻数と頁数などとともに示す。なお、引用において、傍点は本論文筆者によるものであり、原文の強調は強調体で表現する。

(2) 「一」と「二」は『著作集第三八巻』に収められている。また、「三」は、『著作集第三巻』に収められている。

(3) Hua.38.54.

(4) Hua.10.5.XVII.

(5) 「ベルナウ草稿」(『著作集第三十三巻』所収)、「C草稿」(『著作集資料編第八巻』)など。

(6) ここでの「過去把持」という語は、本論文筆者の以下の理解によるものである。『著作集第十巻』の編集者の註記(二二頁および三三三頁)によれば、この「Retention (過去把持)」という用語の最初の使用は、おそらく一九〇四年の草稿(第二七、二八番)においてであるが、そこでの用法は「第一次記憶」に代えられるような本来の意味においてはなく、この本来の意味で再び使われたのは一九〇八/〇九年頃(マイナー版の編集者ベルネの区分によれば一九〇九年以降)の草稿第五〇番においてである。そこ(三三三頁)には次のフッサールの言葉がある。「過去把持 Retention を以前の意識の

諸位相への関連において、記憶 *Erinnerung* と表記するならばすでに誤りが犯されている。記憶は、常に、構成された時間的客体に関連をもつ表現である。しかし、過去把持は、意識の位相から意識の位相への志向的関係を表すために使用される表現であるが、その際、意識の諸位相も意識の連続性もそれ自身再び時間的客体と見なされてはならないのである」。

この言葉はきわめて重要であり、過去把持の本来の理解を示すものである。けれども、本論文では、草稿第五〇番からみれば不十分な理解であったとしてもすでに「過去把持」の思想は、「新鮮な記憶」、「第一次記憶」、一九〇四／〇五年の草稿（例えば第三〇節）での「過去把持」などという用語において出現してきており、それが次第に彫琢されていったものと考えられる。

- (7) 『著作集第十巻』所収の草稿第一番（一八九三年頃成立）。以後「草稿」および「節」は同書に収められているものを指す。なお、同書のB―Iをなす草稿第一から一八番はほぼ一八九三年から一九〇一年に成立したものである。
- (8) Hsa10, S.137.
- (9) 一九〇一年以前に成立したとされ、のちに『内的時間意識の現象学』第三節の一部分として取り入れられた。
- (10) aa.O., S.151.
- (11) aa.O., S.153.
- (12) Vgl. aa.O., S.155.
- (13) aa.O., S.154.
- (14) aa.O., S.167.
- (15) aa.O., S.168.
- (16) aa.O., S.160.
- (17) 「像性の意識」については拙論（小熊2013）を参照。
- (18) 以下の考察は、『著作集第十巻』B―IIに収められている草稿（第十九番から三四番）と、一九〇五年以前に成立して『内的時間意識の現象学』に収められたもの（これは節数で示す）を参考とする。
- (19) フッサールがマイノックの説を扱っている草稿は、第二九番である。
- (20) *Über Gegenstände höher Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung, Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane*, XXI (1899), SS.182-272. ただし本論文での引用箇所は、全集版による。

- (21) Vgl. Meinong, S.386. なお、「非独立的対象」間の関係のうちの「外的に」「非独立的なもの」の例としては、色と延長の関係が挙げられており、その際、色の概念のうちに延長の概念が含まれていないと考えることも十分可能であるという理由があげられている。
- (22) Vgl. a.a.O., SS.443-444. このマイノックの区別には曖昧さが残っており、フッサールは、対象の「時間的规定」とそれ以外の「質料的规定」の観点から自ら区別をしておしているが、それについてここで扱うことはできない。
- (23) ここでは、対象の位置の変化という意味での運動だけでなく、色や音の変化という意味での運動(動き)を含めて「運動」という。
- (24) Husserl, a.a.O., SS.223-224.
- (25) 以下、マイノックの表記にならう、「時間的に広がりをもつ／広がりをもたない対象」を、誤解の恐れがない場合、単に「広がりをもつ／広がりをもたない対象」と表記する。
- (26) Meinong, a.a.O., S.248.
- (27) a.a.O., S.448.
- (28) Vgl. a.a.O., SS.224-225.
- (29) ebenda.
- (30) ebenda.
- (31) 編集者の註によれば、これは、一九〇五年の時間論の元の構想に組み込んだ紙片の草稿である。
- (32) a.a.O., S.229.
- (33) シュテッペンホフの報告によつてフレンターノの図表は、以下を参照。 Carl Stumpf, *Reminiscences of Franz Brentano*, in: *The Philosophy of Brentano*, ed. by Linda L. McAlister, P.38.
- (34) James, W. Vol.1, P.629, Vgl. Kortooms, P.31.
- (35) この草稿「シュテッペンマイノックの議論の成果」は、一九〇五年講義の元の構想に組み入れられた。
- (36) なお、ここでフッサールの論評とは独立にフレンターノの時間論を考察することはできない。
- (37) a.a.O., S.11.
- (38) 編集者の註によると、『内的時間意識の現象学』第一六、一七節は、一九〇五年の講義草稿三八一四〇頁に依拠する。

- (39) Hua10, aa.O., S.38.
- (40) aa.O., S.39.
- (41) aa.O., S.40.
- (42) 『著作集第二二巻 算術と幾何学のための諸研究』所収の草稿「一般的な量と数の概念の明確化の試み」八四頁などにおいてフッサールは、デデキントに言及している。また、空間に関する「理念化」という操作や「理念的限界」については、同書一八六頁―一九三頁、および拙論（小熊 2005）を参照。
- (43) Derrida, J. *La voir et le phénomène*, pp. 68-69. なお、成田は「極限概念」の重要性を指摘している（二六八頁）。
- (44) aa.O., S.41.
- (45) aa.O., S.62.
- (46) こうした「個体化の問題」は、第三〇、三一、四一節で扱われているが、いずれも、一九〇五年の講義草稿に依拠している。
- (47) aa.O., S.85.
- (48) aa.O., S.86.
- (49) Vgl. aa.O., S.85.
- (50) aa.O., S.66.
- (51) Hua10, S.237f. "«III» Seefelder Manuskripte über Individuation".
- (52) 以下『著作集第三三巻』所収「ベルナウ草稿」（一九一七―一八年）でもこの問題は扱われている。
- (53) aa.O., S.39.
- (54) Vgl. aa.O., S.67.
- (55) 周知のように、この図式は『論理学研究 第二巻』において使用されている（例えば、Hua.19/2, S.624）が、一九〇四年―五年の講義の第一部においては、知覚の構造分析において使用されている。また、同講義の「想像」を扱った第三部においては、「感覚」と「ファンタスマ」のあり方が検討されている（『著作集第二三巻』九二頁以下）。そのほか、一九一七年―一八年のいわゆるベルナウ草稿（『著作集第三三巻』所収）でもこれは重要問題の一つをなす。

（おぐま まさひさ・山形大学教授）